

パリの風土の中で



洋画家
奥谷 博

第1回（昭和42年度）の美術部門研修員である、奥谷博先生に体験談をうかがいました。

当時、愛知県立芸術大学に赴任したばかりで、研究室も恵まれていたので、外国に行く必要があるのかなと正直なところ思っていました。パリの風土に触れるだけでも良いのだからと言われて行ったのですが、非常なショックを受けました。

受入れ先は日本人の多いところでは勉強にならないので、アカデミー・ゴエットを選びました。人体デッサンを学んだのですが、ボッティチェリの作品のような脚の長いモデルが本当にいるんですね。それまで描いていた日本人とまったく違っていました。

渡航の目的が制作だけでなく、作品研究でもあったので、美術館や寺院などをかなり訪れました。膨大な点数を観ていくうちに、良いものを身体で感じ習得していったように思います。

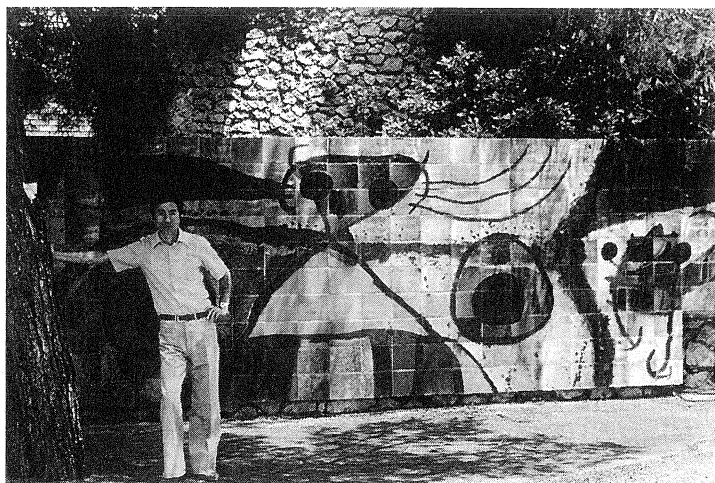
そこに美術の伝統が根付いていることをしばしば感じました。幼稚園ほどの小さな子どもたちが美術館で車座になって、難しい作品について静かに先生の説明を聞いている。制作に行き詰まったときでも、それを解決するための参考になる作品

が、美術館にいくらでも並んでいる。またその伝統が気候風土に根差していることも感じました。冬が寒くて雨が多いのに、色が豊かで風景がきれいにみえる。石の建築のかたちも明快で、油絵具が発達するのも当然と理解できました。

そのように現地において、風土や文化の中で見ることの意義を肌で感じていたので、研修の終わるころにはもっと勉強したくなって、もう一度現地で勉強しようと思いながら帰ってきました。

昨年パリのユネスコ本部で世界遺産を描いた作品の展覧会を開催したのですが、現地で自分の作品がどのように見えるのか不安でした。会場にミロの大きな陶壁があって、それに負けないように作品（巖島神社の赤い鳥居を描いた『霧り渡る』）を送ってもらったりしたのですが、現地の空気の中でそれが日本的な感じに落ち着いてみえ、自分がしてきたことも的はずれでなかったと感じました。そのような感性も、在外研修がきっかけとなって培うことができたと思っています。

現地での滞在について助言があるとすれば、嫌であればその意志をはっきり言わなければと身をもって感じました。また地名を読む場合など、日本の観光案内にあるようになまじ発音を意識するよりも、スベルのとおり読んだほうが、相手がそれを汲みってくれるようです。日本人的な控え目さも大事ですが、間違えることを怖れずに、億劫がらずに交流したほうが多くのものを吸収できるのではないのでしょうか。

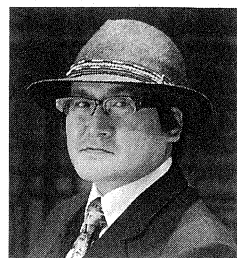


南仏サン・ポール・ドゥ・ヴァンヌのマーグ財団美術館にて

在外研修の思い出

映画監督・大学教授として活動している林海象氏（平成11年映画部門在外研修員）のアメリカ研修体験談です。

映画監督
林海象



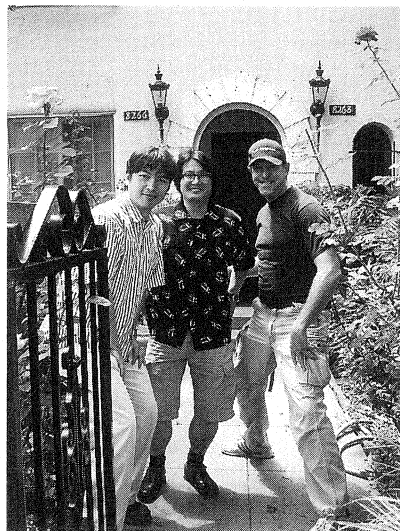
私が在外研修制度（新進芸術家海外留学制度）でアメリカのロサンゼルスに行かせてもらったのは、1999年9月から2000年8月末の1年間だった。研修目的は「ハリウッド映画の研究」だった。日本にいてみんなはよく「ハリウッド映画は……」と口にするが、そう言われるハリウッドは推測の域をでていない、だから自分のこの目で本当のハリウッドをのぞいてみようと思ったのだ。だから住む場所もハリウッドにした。行ってみて驚いたのは、そのころのハリウッド地区はアメリカ人があまり住んでいない。ラテン系とロシア系、そしてアジア人が多く住む場所だった。私のアパートから半径500m以内に住んでいる日本人はたぶん私だけで、スーパーに行っても英語よりラテン語が通じるような、いわば危険な地域だった。

私の頭に描いていた、往年のハリウッドとはかなり違った雰囲気現在のハリウッドだったが、家の近くには「パラマウント映画」のスタジオがあり、そこには何度も見学に行った。ハリウッドの多くの映画は今ではハリウッドではあまり撮影されていない。コストを抑えるためカナダやニュージーランドの撮影所で映画は造られていて、ハリウッドのスタジオで撮られているのはテレビシリーズなどが主だが、撮影所の雰囲気は十分に維持されていて、ここにあの探偵フィリップ・マーローのレイモンド・チャンドラーもいたのかと思うと、50年代のハリウッド黄金期の風景が蜃気楼のように浮かび上がった。ハリウッド地区で撮影される映画のロケにもよく顔をだした。北野武監督の「ブラザー」も見学した。北野監督の現場は俳優のひかえのトレーラーが何台も並んでいて、さすが世界のキタノという風格があ

り、現場にいる日米混成チームの映画人たちにも緊張がみなぎっていた。

私も日米の映画人の卵たちをあつめて、研修として即興的な映画を撮影してみた。日米2か国の映画人の卵たちは、国と言葉の違いがあるだけで、映画にかける思いは同じだということが確認できた。その時の助手が現在「かもめ食堂」「めがね」を監督した荻上直子さんだった。今は立派な監督だが、そのころは英語のうまい可愛い大学生だった。日本人がアクション監督をしているというので、20世紀FOXTVの「パワー・レンジャー」の現場にも行ったが、そこでアクション監督をしていたのは、私が以前に撮った「ジパング」という映画のときにスタントマンをしていた横山君で、日本から離れた異国の地での再会に感動した。その後、横山君のように多くの日本人がハリウッドで活躍していることを知った。

そんな経験をしているうちに研修期間の1年間はアツという間に過ぎ去った。あの研修期間は、私のその後の人生に大きな影響を与える貴重な1年だった。そういう機会を与えてくれた在外研修制度には心から感謝している。ありがとうございました。



ハリウッド時代の友人

左：ライオン・フルックス（脚本家）
右：リオ・チェン（現ミネソタ大学准教授）
中央：筆者

ヨーロッパで広がった機会

ヴァイオリニスト
大谷玲子



私は、文化庁在外研修員（平成9年度）としての1年間を含め、ベルギー・ブリュッセル王立音楽院に6年間留学いたしました。留学したきっかけは、着任早々のイーゴリ・オイストラフ教授のクラスで学ぶためでした。オイストラフ先生には、一番弟子として大変可愛がっていただき、人一倍レッスン時間を多く割いてくださり、数多くのレパートリーと、特にロシアの音・奏法について、徹底的に学びました。帰国後も、新しいレパートリーを学ぶときなど、折に触れご指導いただいております。

また、入学してすぐにポーランドのヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクール（平成8年）で最高位をいただいて、留学直後から予期せずヨーロッパでの演奏活動をはじめることになりました。日本からはなかなか招へいできなくても、ヨーロッパ内での移動は近いので、各国での演奏活動はそれほど大変なものではありませんでした。特にワルシャワのフィルハーモニー大ホールや、オランダのコンサートヘボウ大ホールなどの歴史ある名ホールで、ソリストとしてオーケストラと共演し超満員の聴衆から大喝采を受けた経験は、演奏家としての大きな自信になりました。

演奏活動以外にも、各国で行われている講習会や音楽祭、国際コンクールに出場した際、数々の素晴らしい先生方に出会うことができ、その先生方からレッスンを受けたり、同世代の各国の優れた音楽家たちと知り合ったり、演奏の機会をいただいたりしたのも貴重な経験となりました。

留学中、素晴らしい演奏に数多く触れたのも大きな収穫でした。ベルギーでは、学生は演奏会のチケットが半額だったり無料だったりしたので、できる限りいろんな演奏会を聴き、たくさんの感動を覚えました。

今年はベルギーの名ヴァイオリニストで作曲家だった、ウジェーヌ・イザイの生誕150周年にあたります。難曲として知られるイザイの無伴奏ヴァイオリンソナタ全6曲は、日本にいたころからいくつか弾いていましたが、ベルギーで、実際残っている自筆譜や手紙を見たり、お墓や作曲部屋などゆかりの地を訪ねたり、またイザイの演奏法を知る人たちや研究者たちに学んだりするうちに、ますます深く勉強したいと感じるようになりました。今年夏に、イザイの無伴奏ヴァイオリンソナタ全6曲を私の初のCDアルバムとして発表いたします。在外研修中の経験がこうしてまた一つ形として実を結ぼうとしていますことに、改めて感謝いたしております。



イーゴリ・オイストラフ先生と

在外研修でいただいた宝物



松山バレエ団団長・バレリーナ
森下洋子

ふるさと広島で3歳のときにバレエというすばらしい芸術と出会い、ただこれを続けたいという強い思いを抱き、その思いを受け止めてくださる多くの方々に支えていただき、この道を歩んでまいりました。

20代のころ、世界とはどのようなものかを知りたいと思い、清水哲太郎とともに出場したヴァルナ国際バレエコンクールで金賞をいただきました。その後1975年から1年間、モナコのマリカ・ベゾブラゾヴァ先生のもとで在外研修として勉強させていただくことになります。日本の皆様の代表として、国のお金で海外で学ぶ機会をいただいたのですから、日本人として日本に戻って文化芸術に少しでも貢献したい、クラシックバレエという西欧で生まれた芸術を日本人の文化として発展させていきたいという使命感を清水と二人、とても強くもっておりました。

また、この研修の中で、マーゴ・フォンティーンやルドルフ・ヌレエフなど踊り手としてだけではなく人間としてもとても大きく、尊敬できる方々とのすばらしい出会いをいただきました。そして幸運にもニューヨークやヨーロッパなど各地で同じ舞台に立つことができたのです。マーゴもヌレエフも、舞台にかける深い思いから生まれる劇場全体を包み込む温かさ、命と引き換えに踊りに立ち向かう潔さなど、舞台人として、そして人間としてとても大切なことを肌で教えてくださいました。この時期に舞台の上で体で学んだ輝きは、今も私の魂の奥底に深く刻み込まれている宝物です。

今年、舞踊歴57年目を迎えました。若いころに在外研修でいただいたすばらしい出会い、大切

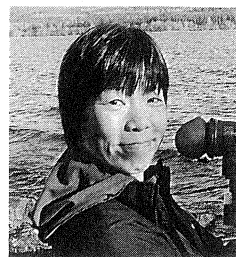
な学びは今踊りを続ける大きな原動力となっています。バレエにすべてを賭けた先人の方の、人々の心に幸せを届けたい、愛すること、信じることの強さを伝えたいという祈りを引き継ぎ、技術だけではなく人間が本来もっている魂の輝き、心の美しさを表現したいと思っています。

悲しいニュースが多い昨今、バレエ団でバレエを通じて心と体を磨いていきたいと稽古に励む若い団員たちと心をつなげて、生きることの尊さ、愛することの確かさを伝えられる強く、澄んだ舞台を創っていきたい。そしてご覧になった方々の心に温かい思いやりの心、信じあう絆が生まれ、そこから平和で、美しい未来への道がほんの少しでも拓かれたらと願っております。そのために、日々こつこつと稽古をし、踊り続けること。それが在外研修という貴重な経験をさせていただいた私にできる唯一の務めだと思っています。



この5月に上演した松山バレエ団60周年記念『眠れる森の美女』全幕公演 第3幕グラン・パ・ド・ドウより ©photo by A. I

名匠の世界をかいま見て

撮影
大澤佳子

1年の映画分野でのイギリス在外研修で、私の宝となったのは憧れの撮影監督たちに出会えたことです。

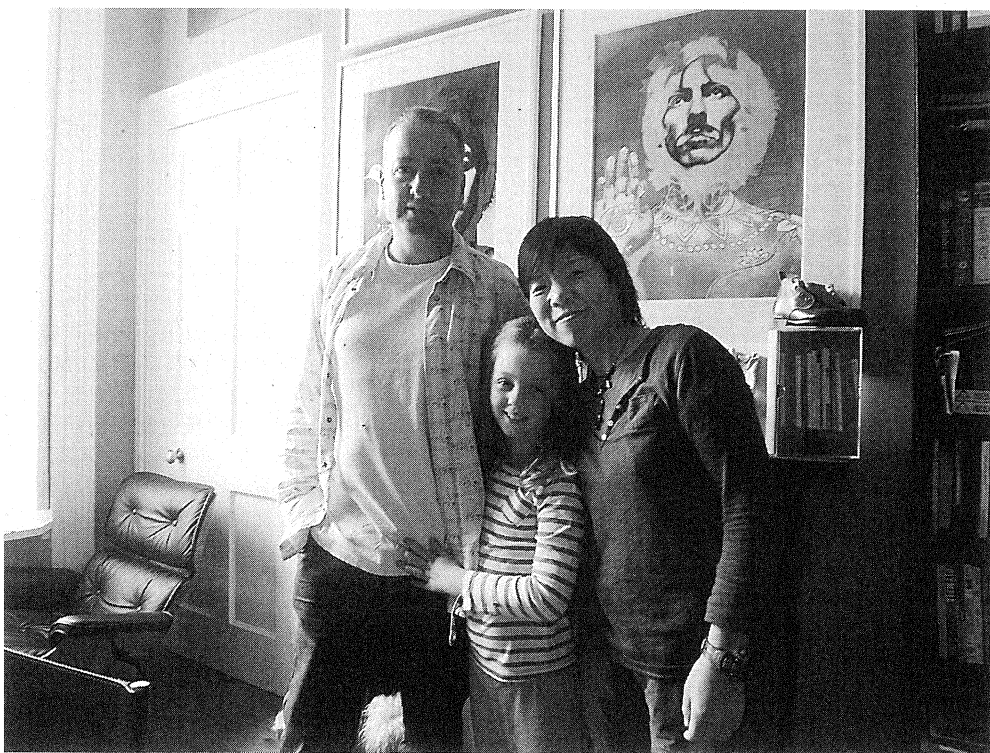
『秘密と嘘』のD・ポープ、『めぐりあう時間たち』のS・マッガービー、『ディアハンター』のV・シグモント、『パリ、テキサス』のR・ミューラー、『麦の穂をゆらす風』のB・アクロイド、『ブエノスアイレス』のC・ドイルといった面々です。私にとってはスーパーヒーローである人たちと言葉をかわすことができたのは、体が震えるほどの感動でした。

多くはポーランドで開かれた映画祭、カメラマジジでのことでした。この映画祭は撮影監督の仕事の評価するためのユニークなものです。一応コンペティション形式ではありますが、終止温かい雰囲気、お互いの仕事を批評し、健闘を讃え合います。労働条件や技術革新についての意見交換もあり、作品へのアプローチも熱く語ってもくれます。ある撮影監督などは10日間しゃべりとおしで、映画祭終了時には声が出なくなってしまうほどです。世界中の一流の映画監督たちが国を超え楽しく交流していることは驚きで、感銘

をうけました。

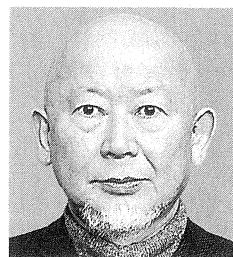
また、名カメラマンによるセミナーも開かれ、若いスタッフと名匠との交流を促してもいました。私もさまざまなセミナーに参加しました。彼らが一本一本の映画のスタイル、世界観を作り上げることを、予算に縛られ、苦しみながらも、自身の責任であると同時に喜びと感じている様がありありと伝わってきました。その映画に対する姿勢は非常に見習うべきものがあり、帰国後の私を力強く支えています。

たった1年でも、海外で暮らすことは日本の文化を見る目を変化させます。今、低予算の仕事をこなす日々ですが、私の目を通した日本を写し、映画のスタイルの一部にすることに夢中になっています。



S・マッガービー氏と

歴史の中で

日本画家・了徳寺大学教授
谷中武彦

留学に当たって、なぜ日本画を勉強するのにイタリアへ？ と質問を受けたことがあります。日本画は日本の歴史の中で育まれた絵画であり、長い年月の間にたくさんの良い作品が生まれ、日本で十分学ぶことができるのではないかとの考えがあったからでしょう。

すばらしい作品は世界の各地にあり、芸術に国境はありません。他の国の芸術文化に触れ、自分にはない何かに刺激を受けることは新たな創造につながると思ったからです。

12世紀ごろからルネッサンス期にかけてのテンペラ画やフレスコ画に興味があり、そのため深い歴史と文化をもったイタリアを選びました。ユネスコ修復センターのポール先生のもとで勉強することになりましたが、技法を学ぶよりも多くの作品をじっくりと見ることをすすめられ、各地の寺院や美術館を訪れ研究を重ねました。たくさんの作品と向き合ってますと、理屈ではなく作品の内側から声が聞こえるように感じられ、恩師の故吉田善彦先生から、作品をとおして感じる心の眼、心の声をやしなってきたくださいと言われたことが思い出されました。

小さなまちでもすばらしい作品が寺院の壁を飾り、多くの人々の心の支えになっているのはうらやましいかぎりです。人々は生まれた時から歴史を感じるまちの中で生活し、ごく普通に芸術作品と接していました。私もほんの少しその中で生活できたことは良い経験となりました。多くの研修生にもぜひこのような経験をしてもらいたいと思います。

美術館へ行くのは生活の一部のようでもあり、小さい子どもたちが作品の前で先生の話熱心に

聞いている場を目にすることがありました。このような環境の中で育った子どもたちは心豊かに成長していくことでしょう。ぜひ学びたいものです。

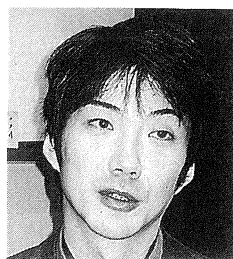
石造りの建物は多くの壁で区切られ、私には堅苦しく感じられますが、それを和らげるために壁画が発達しました。教会等は伝道の意味を込めテンペラ画やフレスコ画で壁面を飾ったのでしょうか。日本の障壁画や屏風の発達とのちがいが肌で感じることができました。留学生活も終盤になりますと色々なものが見えてきて、日数がもっとほしくなったのは私だけではないと思います。帰国準備を含めて慌ただしく過ぎていきました。

帰国後、障壁画や仏像を見るため京都、奈良へ出かけあらためて日本の美を堪能しました。奈良のまちを歩いて路地に入りますと、吹き抜ける風がローマのまちを思い出させてくれました。歴史の匂いとでもいうのでしょうか。作品を見る眼、美を感じる心など多くのことを学ぶことができたのも在外研修で過ごしたイタリアでの1年間が大きな力になっているように思います。自分を信じ一步一步前進あるのみです。



1983年4月ローマ、テルメ美術館にて

私は狂言師

狂言師
野村萬斎

小さいころから父の海外公演に同行していたこと、さらに1991年にイギリスであったジャパンフェスティバルでシェイクスピアの作品を狂言に翻案した「法螺侍」を上演し、自分の中で狂言と他の演劇との垣根が取れた思いがし、さらに狂言の技術はいろいろなものに使える、還元できるということを確かめたいという思いから94年にロンドンに行かせていただきました。

その年は大河ドラマに出演していて渡航直前まで撮影で、行ってから留学準備が始まったような状態で、ホテルで暮らして住むところを探すものの、これがなかなか決まらなくてホテルのランクも落として行かざるを得ない、最初の3か月はかなり苦しかったです。

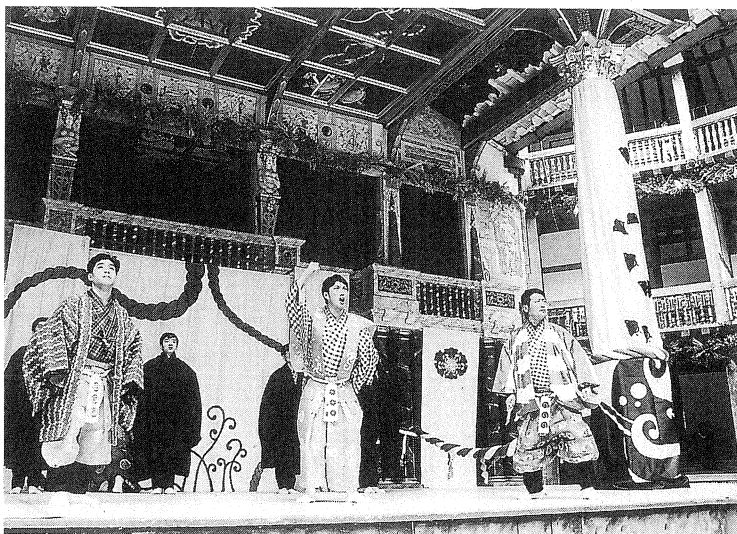
私の受け入れ先はロイヤルシェイクスピアカンパニーでしたが、シェイクスピアの場合、本は残っているが演出は残っていないため古典作品に現代的演出を施すことになる。狂言は本も演出も時代時代に工夫、改良は加えられながらも代々伝わるものがあります。しかし古典を現代に活かすという意味では同じはずだと、そんな思いから演出、リハーサル、そして他の劇団を含め多くのシェイクスピア作品を見ました。

シェイクスピアは言葉の演劇ですべてセリフで伝えますが、狂言には身体表現が伴います。逆に舞台は能舞台、グローブ座ともに、シンプルで舞台機構や照明効果も使えない。シェイクスピアもセリフを全部視覚化するのではなく観客の想像に委ねている部分が多い。その舞台と観客の有機的なつながりが本来のシェイ

クスピアではないか、また狂言と通じるのではないかと確信しました。

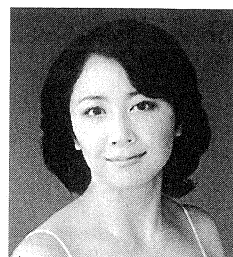
もう一つ確信したのが狂言は教育にも生かせるのではないかという発想も含め、狂言という文化を背負っているということは自分は公的な人間だという意識を確信したこと。公共劇場である世田谷パブリックシアターでも公共性を考えながら、自分の芸術作品としての個性を盛り込まなければならない。これは狂言をやっていて伝統を守り、損ねないようにしながら、しかも自分の個性を出したい、自分の表現でありたい、ということと一致するものです。今の活動状況はまさにイギリスでの経験の賜です。

今後も単に狂言師というより、伝統を受け継ぎつつも現代という時代との付き合いも考え、時には創作もし、野村家の伝統とする進取の精神もあわせもちながら、新しい伝統をつくり上げたいと考えています。また、文化庁文化広報大使のご指名も受けましたが、在外研修で考えたことを含めお役に立てればと考えています。



グローブ座で行われたロンドン公演

私の留学体験

歌手
林 美智子

この在外研修の期間を通じて、さまざまなレッスンや観劇、実演の機会、リハーサルの見学を体験し、ヨーロッパを中心としたさまざまな国の音楽、声楽曲、特にオペラにおける自分のレパートリーについてさまざまな示唆に富む助言や出来事に出会いました。

今振り返って実感していることは、声とは技術や訓練による形成だけではなく、本当に精神的な心の状態を、肉体をとおして体現していくものである、ということです。それは二人と同じ人間がいないように、人それぞれ十人十色ですが、その時その時の精神状態が、楽器を用いた場合とはまた違い、直接的に反映されるからです。年とともに身体も声も精神も成長していきます。その自然な時間の流れに無理なく呼応していくことが声楽家としての本来の歩み方であると思いました。決して焦ることはないのです。

人はとにかく結果を求めるあまり、ある程度の時間を要して作っていかねばならないものも、その半分くらいの時間、できればなるべくそれよりも短期間で無理矢理に結果につなげる努力をしてしまいます。時にはそういう努力が必要な場合もありますが、そこには常に自分を他と比較していかなければならない、という状態が伴われます。

私が思うことは、特に自分たちのように

無形の芸術を創造、表現していく立場においては、もっともっとそういう所を離れた感覚で表現者として音楽に接していかなければならないのではないかと、ということです。

自分自身を、己を知っていく、見抜いていく、自覚していく、見返っていく……要するに自分に与えられたものの中で、常に自分自身との戦いに勇んで臨んでいけることが大事だということを学ばせていただき、現在もその考えのもと、演奏活動を続けさせていただいております。



『熱狂の日』音楽祭 2008 にて

教室と映画館と図書館とカフェ
UCLA の1年松竹株式会社映像製作部映画製作室
山本一郎

私は、2006年9月から翌年の8月末まで、ロスアンゼルスUCLAに客員研究員として、新進芸術家在外研修制度のもと、渡米させていただきました。松竹を休職したのですが、研修終了後、さらに1年休職期間を延ばして私費で滞在したので、職場に復帰したのは、本年9月2日でした。現在は来年撮影予定の山田洋次監督作品に携わっております。

私の研修計画は、ジャンル論（ロマンティックコメディや西部劇など“ジャンル”別の映画分析ということになるでしょうか）に沿って、主に大学院の授業を聴講し論文を読み、500から600本の映画をみるというものでした。渡米前には、「研究滞在するなら1年に1000本はみないと、遊びに来たと思われる」と米国で博士号を取った方から注意を受けましたが、しっかりとした映画史と理論をもとに取り組みたいと説明（言いわけ？）したのを覚えています。

あっという間の1年は、ひたすら時間が足りないという圧迫感のもと、朝から深夜まで大学かその近辺のカフェ、アメリカンシネマテークと名づけられた主にアメリカ映画の旧作を上映する劇場でほとんど過ごしていました。

半年経過したところから、映画学科の教授からいっしょに授業をしようと提案してもらったり、私が携わった「たそがれ清兵衛」や「珈琲時光」あるいは松竹についてゲストスピーカーとして学部や大学院で講義や講演をしたりして、その準備や“反省と悔恨”でかなりの時間を使ったこともあり、1000本は無理でしたが、当初の予定どおり、これは自分にとって大事だと思った約600本

にしぼって大学のアーカイブや映画館でみることができました。その多くはハリウッドの旧作でしたが、当時の政治や経済の状況をふまえ、論文や伝記などをつねに参照していたので、知っていたものの映画がまったく違ってみえたり、この映画を今まで知らなかったのかと、自分を恥じると同時にかなり興奮しました。それは例えば、F・W・ムルナウ監督の「サンライズ」やジョン・フォード監督の「若き日のリンカーン」、35mmナイトレート（可燃性）フィルムでみたM・ルロイ監督の「仮面の米国」（UCLAの大教室兼映画館で学部学生向け授業にて上映）などです。

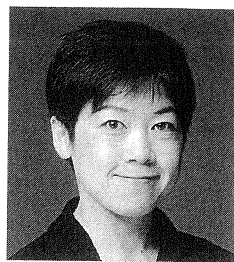
睡眠不足とストレス（とりわけ英語力）と倍近く年の離れた学生の方々があまりにも身近にすることで、私自身の体力をまったく勘違いして、いく度かダウンしてしまいましたが、深夜のカフェで熱心に勉強を続ける彼らに混じって、ハーブティーを飲みながら辞書を頼りに教科書や参考文献を読む日々が蜃気楼のように浮かびます。

私費で滞在した2年目、生活そのものは1年目をほぼそのまま続けることとなりましたが、大きな違いは映画学科の大学院でクリティカルスタディーズからプロデューサーズプログラムという部門に移ったことと、私が携わった「武士の一分」の米国公開に宣伝や舞台挨拶などでかかわったことです。

すばらしい教授と学生、施設、そして図書館のスタッフの方々に心から感謝しています。貴重な機会をいただき、本当に有難うございました。私にとって、新たな、まったく違った、基礎ができたと思っております。

海の向こうの仲間と

俳優・演出家
小林七緒



2000年9月、文化庁在外研修員としてカナダに出発しました。研修先にカナダを選んだのは、所属する劇団がカナダ演劇を何度か上演しており親しみを感じていたことと、「人種のモザイク」と呼ばれるほどの多民族国家では、言葉だけに頼らずにどのように演劇をつくるのかに興味をもったからです。

バンクーバーでの研修は、若手の俳優さんたちとのワークショップから始まりました。現場で知り合いになった彼らは、ちょうど1本の小説を題材に、上演を念頭においての台本づくりをしており、言葉だけでない表現の可能性を探っていました。参加メンバー全員が毎回アイデアをもちより全員で試行錯誤するのです。私のつたない英語で伝えきるか不安でしたが、彼らは実に根気よく理解し、また身体を動かしていっしょにやれば簡単に意思疎通できるのがとても新鮮でした。そして「おもしろいと思うこと」や「身体表現の可能性」は国や人種を超えて共通なんだと実感しました。

研修後半には、トロント郊外の演劇祭で、10代の子どもたちのお芝居の共同演出をやりました。13～18歳の子どもたちが夏休みに2か月間合宿して、1本の芝居を上演します。最初はまっすぐ立つのも難しい子が、6週間の稽古で見違えるほど集中した演技を見せるようになり、本番では毎ステージ涙ができました。

充実した1年間の後も、海の向こうの仲間との交流は続いています。2002年春には、先のワークショップをたたき台に「アインシュタインズ・ドリーム」という作品をバン

クーバーで上演しました。台詞をほとんど使わず、俳優の身体と映像・音楽などで見せる芝居です。私も俳優として参加し、アインシュタインの妻役などやらせてもらい、貴重な経験をしました。また国内ではカナダ戯曲を演出する機会にも恵まれ、2007年にはカナダ現代演劇祭を無事に成功させることができました。

今後も「おもしろいことは海を超えて」の思いを強くもち、さまざまな場面でこの経験を生かしていこうと思っています。



2002年5月 カナダ・バンクーバーの劇場にて
共演者のカミヤ氏と

感性を醗酵させる在外研修



彫刻家、国画会会員、日本美術家連盟常任理事
大成 浩

私が彫刻を意識し始めてから40数年経ちますが、その間の“私の海外研修”は、およそ三段階に分けられます。

第一段階は、大学教育を終えて、いよいよ本式に石彫で戦っていこうと思い始めたころです。若い彫刻家として自分がどこまで通用するのか腕試しをしたい、広い世界を見てみたいという思いが募り、実践をとまなう渡航にこだわっていた私は、日本美術家連盟が募集していたユーゴスラビア国際彫刻シンポジウムに応募しました。彫刻シンポジウムとは、採石場や制作会場に原石を運びこみ、一定期間寝食をともにして芸術論を戦わせながら、個々のまたは合作の作品をつくる美術運動です。1969年夏、アドリア海奥の会場で、2か月間10トン強の大理石を彫ったときは、29歳でした。初めての単なる異文化接触以上の体験をとおして、世界の奥行きを垣間見た瞬間は、“井の中の蛙”を悟った興奮と喜びがありました。

その後、日本の風土に合った彫刻とまちの新しい空間づくりが必要ではないかと考えるようになり、1976年に八王子彫刻シンポジウムを市民とともにスタートさせました。これは25年10回続き、また同時に始めた市民対象の林間彫刻教室は26年間毎夏開催しました。

さらに私は自身の仕事を深めるべく、第二段階として文化庁在外研修に挑戦し、米、伊、独国での研修が可能となったときは、39歳になっていました。30年後の今日、振り返りますと、彫刻三昧に浸ることのできたこの1年間こそが、今も最も大きな内的影響を私に与え続けている時間帯であったと思います。現地での制作と発表は、魂の強烈な吸収と表出であり、私の感性構造の一部を変質させました。我ながら以前の仕事が、別人のものに見えるときもあり、不思議でした。ワインの熟成にも似た感性の醗酵は、今も続いていると思います。

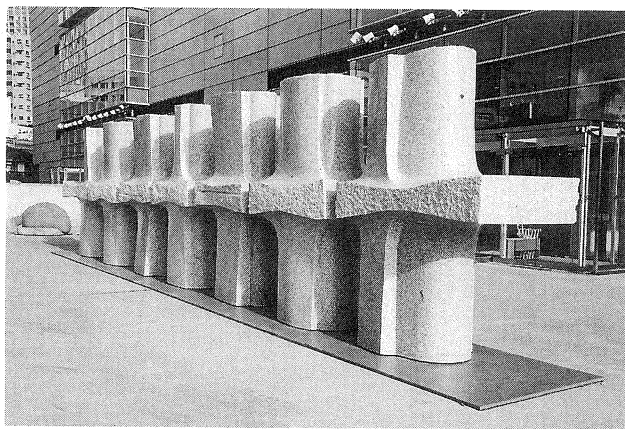
私にとって、在研時間帯の意味は、仕事の間を変えることにより、発想や展開が、きわめて自然になり、また、作家生活上の客観性や視野の広が

りとともに、自己の方向性をオリジナリティーとして明確に意識できるようになったことにあると思います。

そして、第三段階へと続くのですが、今まで夢中でやって来た試行錯誤が、少しずつ形態化しているという驚きと自信を味わえるようになってきました。今は、その“海外”という意識を越えて、通常の作家活動となっています。オーストリア、イタリア、ポルトガルなどの国際彫刻シンポジウム参加やプラハなどでの個展やイタリアなどの招待展等々、淡々と続いているのですが、実際は大変な胸突き八丁であり、アルプス登山のようでもあります。

プラハ国立美術館での「風と蜃気楼—大成浩展」では全出品作品32点（総重量20トン）を新作とし、ロングコンテナで、船と陸路で輸送しました。プラハでの3か月間の展示の後、デュッセルドルフ手工業会議所での1か月間の展示は、「ドイツにおける日本年1999/2000」事業にも参加認定されました。これもまた在研時からの流れであり、継続の繰り返しの結果となったものだと思います。

“在研時代”は、私にとって“青春時代”にも似て、大切ななつかしさであり、「今」につながる重要な転機でもあります。

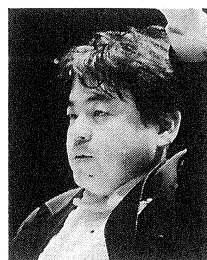


大成 浩『風の地平線—蜃気楼』

高さ270×幅1400×奥行100cm、総重量50トン、白御影石
2007年第81回国展（国立新美術館）出品作

3人の先生たち 10年前のウィーンにて

読売日本交響楽団正指揮者
下野竜也



© T. Urano

1999年9月より、文化庁の在外派遣研修員としては約1年、ウィーンに留学させていただきました。音楽の都ウィーンの街の雰囲気は何もかもが夢のようで、毎日のように通ったオペラ（もちろん、立ち見！）もそれはそれは素晴らしいものでした。

しかし、今回は、ウィーン的生活よりも、徹底的にレッスンをしていただいたウィーン国立演劇音楽大学指揮科でのお話をさせていただきたいと思います。日本で仕事をスタートさせてからの留学でしたので、自分より約10歳は若いいろんな国の学生たちがクラスメイトでした。みんな若いながらもしっかりと自分の意見を持ち、また、日本的な長幼の序などありませんので、歳は関係なく対等にいろんな意見を言い合える雰囲気に最初は飲まれがちでしたが、自分の意見をきちんともち、それを伝えるという、指揮者に必要な要素を彼らから鍛えられたように思います。

私のクラスは、主任教授のモーツァルトの権威として有名なレオポルド・ハーガー教授、ルーマニア出身の東欧で活躍なさっていた故エルヴィン・アツェル教授、ハーガー教授のアシスタントで、数多くの指揮者を世に送り出された湯浅勇治先生の3人が担当していらっしゃいました。ハーガー先生は、それはそれは厳しい先生でした。お話になられるドイツ語も、やたらと（失礼！）難しい言葉をお使いになられていました。レッスンもたいへん厳しく、同じ楽譜を使っているにもかかわらず、日本人の私が指揮することで出てくる音のリズム感や、音色など、オーストリア人の先生からご覧になると違和感があるのでしょうか。徹底的に直されました。そして、ある日、僕にこうおっしゃいました。「あなた方、東洋人にはチャイコフスキーや、プッチーニのような音楽は、感情に訴えかけてくるものが直接的ですから、理解しやすいでしょう。でも、モーツァルトのような古典派の音楽は無理でしょう。しか

し、私は、その古典派の音楽の美しさ、様式美をあなた方に教えたいし、学んでほしい」ととてもショックな言葉でした。でも、それは教育者としてたいへん愛情に満ちた言葉でもありました。そのウィーンの古典派の音楽を勉強するにあたって、西洋人がもっていて東洋人がなかなかもち得ないたたずまいを、細かく分析してそれを実践し、惜しみなく指導してくださったのが湯浅勇治先生でした。ハーガー教授のおっしゃることが少しずつ見えてきたのは、湯浅先生のおかげです。もう1人のアツェル先生は、たいへん温厚な先生で、私たちの硬くなってしまいがちな指揮を、もっと大きくもっと朗らかにしてくださったように思います。先生の指揮になると、とたんに演奏が温かい音色になり、そこにいるみんなが幸せな気持ちで、先生の演奏を聴いていたものです。

3人の先生方により徹底的に鍛えていただいたのは、世界遺産ともいえるべき名曲たちを、オーバーな表現をすることなく、美しい様式美をもって演奏することでしょう。帰国して、改めて接した日本の文化の美しさを見直せたのも、それぞれのもつたたずまいを感じることができたからだと思います。下宿先と学校と国立歌劇場を行き来していたあの留学時代に得た財産は、今も、色褪せることなく、今の私の仕事を支えています。



© T. Urano